

マラノーチェ

2007(平成19)年7月12日鑑賞<試写会・テアトル梅田>

★★★



製作・監督・脚本・編集＝ガス・ヴァン・サント／脚本＝ウォルト・カーティス／原作＝『マラノーチェ』ウォルト・カーティスによる自伝的小説／出演＝ティム・ストリーター／ダグ・クーヤティ／レイ・モンジュ／サム・ダウニー／ナイラ・マッカーシー／ロバート・リー・ピッチリン（ワイズボリシー配給／1985年アメリカ映画／78分）

……『エレファント』（03年）等で有名なガス・ヴァン・サント監督の1985年の処女作が今蘇った！ 舞台はポートランド市のスキッド・ロウ（スラム街）、そしてテーマはアメリカ人男性によるメキシコからの不法入国少年に対する同性愛。ストーリー性を求めるのではなく、彼らの生きザマをどう感じるか？ ガス・ヴァン・サント監督はそれを追求していることはよくわかる。しかしてそんな映画、あなたは好き、それとも……？

マラノーチェとは？ 主人公は？ テーマは？

マラノーチェとは「最悪の夜」という意味。そのタイトルの意味するものは何か……？ 多分それがこの映画最大の焦点……？

次の焦点は、この映画の主人公のキャラ。彼の名はウォルト（ティム・ストリーター）で、オレゴン州のポートランド市の場末にある街角の小さな食料品店で働くアメリカ人の男。

第3の焦点は、この映画のテーマだがそれは「同性愛」。しかもそのミソは、その「お相手」がメキシコから不法移住してきた自称18歳の少年ジョニー（ダグ・クーヤティ）であること。長身で長髪そしてあさ黒い顔をした細身の若者だが、その野性児のような荒削りの美しさにウォルトはたちまち虜になってしまったらしいが……。

ガス・ヴァン・サント監督とポートランド3部作

この映画は、ガス・ヴァン・サント監督が1985年に発表しながら長らく封印され

ていた伝説のデビュー作とのこと。プレスシートによると、ガス・ヴァン・サント監督は1952年にケンタッキー州ルイヴィルで生まれたが、家族の都合で現在の拠点であるオレゴン州のポートランドに居を移したため、ポートランド市を舞台にして、その後『ドラッグストア・カウボーイ』（89年）と『マイ・プライベート・アイダホ』（91年）をつくった。そのため、この『マラノーチェ』を含めて、ガス・ヴァン・サント監督の「ポートランド3部作」と呼ばれているとのこと。

ガス・ヴァン・サント監督の代表作は、コロバイン高校の銃撃事件を描いた『エレファント』（03年）。これは、2003年のカンヌ国際映画祭でパルム・ドール賞を受賞した作品だが、私にはその良さが全然わからず、酷評したもの（『シネマルーム4』221頁）。

プレスシートにあるガス・ヴァン・サント監督のプロフィールによると、『エレファント』を含めて『GERRY ジェリー』（02年）と『ラストデイズ』（05年）で「死の3部作」と呼ばれる映画づくりをしたのが第3期。そして『誘う女』（95年）、『グッドウィル・ハンティング』（97年）、『小説家を見つけたら』（00年）の成功など大作系に挑戦した第2期があり、「ポートランド3部作」は第1期とのこと。

原作はウォルト・カーティスの自伝的同名小説

この映画の原作は、1941年生まれのウォルト・カーティスが1977年に初めて著した自伝的小説『マラノーチェ』とのこと。そして、この小説に惚れこんだガス・ヴァン・サント監督がニューヨークの広告業界で働いて250万円の資金を貯めてポートランドに戻り、私財を注ぎこんで、この映画を完成させたとのこと。

私なりに整理すると、この小説が出版されたのがウォルト・カーティス36歳、ガス・ヴァン・サント監督25歳の時。そしてこの映画を完成させたのはガス・ヴァン・サント監督33歳の時となる。このウォルト・カーティスは「ポートランドの生ける伝説として、詩、小説、絵画にまで創作の手を広げる本当の自由人」とのこと。また、「実際にギリシア系の家族が経営する食料品店で働き、酔いどれたちと接してきた彼は、その客層と、店にやってくる不良少年たちに共感したという」から、まさにこの映画の主人公ウォルトはウォルト・カーティス自身。

舞台はポートランド市のスキッド・ロウ

この映画の舞台となったのはもちろんポートランド市だが、その中でもうらぶれた界隈で、酔っ払い、ジャンキー、ギャンブラー、娼婦らが集まる地区。そしてそれをスキッド・ロウと呼ぶらしい。スキッド・ロウ (skid row) とは、どや街、スラム街のことで「be on skid row」とは「浮浪者である」ということだから、要は、社会からつま弾きにされたアウトサイダーたちの吹き溜まりのことで、大阪で言えばさしずめ新今宮界隈……？

ジョニーとその友人ロベルト・ペッパー (レイ・モンジュ) たちは不法移民だから、警察に発見されればすぐに強制送還される運命。したがってジョニーたちは、まともな仕事に就くことはできず、安宿に住みながらのその日暮らしだから、窃盗などは日常茶飯事。そんな若者ジョニーに惚れこんでしまい、何とか彼の心と身体をものにしたいと心底から願ったウォルトは……？

1985年の処女作が、なぜ今……？

1985年のガス・ヴァン・サント監督の処女作がなぜ今……？ プレスシートによるとそれは、HDにて復元に成功し今、ニュープリントで蘇ったため。その技術的なことはよくわからないが、20年以上前の名作で、長らく人目に触れられることなく封印されてきた作品が、鮮やかに蘇るのはすばらしいこと。ちなみに『砂の器』(74年) や『二十四の瞳』(54年) については最近ニュープリントによる上映がなされたが、これからも昔の名作を次々とニュープリントで蘇らせてほしいものだ。

25ドルは高いの？ それとも安いの？

一目あったその日から、恋の花咲くことがある。これは昔はやった人気番組のキャッチフレーズだが、ウォルトはジョニーを一目見た時から惚れてしまい、心もそうだがまずはその身体をモノにしたいと願ったらしい。と言っても、それはあくまで劣位にある不法入国のメキシコ人に対して優越的地位にあるアメリカ人としての恋心……？

先進国はどこでも売春や買春は犯罪だが、日本ではいわゆる「風俗」という言葉でその裏道がいくらでもあり、摘発されるのは数%のみ。弁護士としての私の感覚では、

その相場(?)は日本では2、3万円というところだが、ウォルトが出した条件は25ドル(約2500~3000円)。アメリカの、しかもポートランド市の相場がいくらぐらいなのか全くわからないから、これがどの位の提示なのかの判定がつかないのが難点。つまり、常識的な金額の提示なのか、それとも破格の条件なのかが大きな問題。

7月10日(日本時間11日)の米オールスター戦でランニングホームランを放ち、大リーグの舞台で日本人としてはじめて最優秀選手(MVP)に輝いたイチロー選手が、7月13日(日本時間14日)、来季から5年約9000万ドル(約110億円)の大型契約を結んだことが報道されたが、これはマリナーズがイチローをマリナーズの顔として処遇したことの表れ。したがって、ウォルトもジョニーをホントに心から愛しているというのなら、それなりの金額を提示することが必要なはずだが……。

男同士の同性愛の姿はどうも……？

食事に誘ったり、車に乗せたり、ゲームセンターにつき合ったりとウォルトはさかんにジョニーのご機嫌とりをやっているが、ウォルトの狙いを知っているジョニーは1人では応対せず、常に友人のロベルトなどを同席させての対応に。しかし、ジョニーの思いに反して、友人たちの発言は「金をくれるのなら、ウォルトの思いに応じる」と無責任なもの……？

その結果、ある日ウォルトの思いが遂に実現することになり、そのシーンがスクリーン上に流れることになるが、男同士の同性愛の姿は私にはどうも……？ さて、皆さんは……？ 1度思いを遂げると、後は飽きてしまうかそれともハマってしまうかのどちらかだが、ウォルトのジョニーに対する思いは明らかに後者。ところがなぜか、ある日ジョニーはウォルトの前から姿を消してしまうことに。一体それはなぜ……？

悪ガキそのものだが……？

ジョニーは18歳と言っていたが、ホントは16歳……？ 外国人の年齢は私にはなかなかかわからないが、ゲーセンでの遊び方や友人同士のふざけ方、さらには車を運転させた時の危なっかしさや拳銃のもてあそび方を見ていると、悪ガキそのもの……？

したがって、万引きで捕まる可能性も高いが、それ以外の何らかの悪ガキぶりで捕まることは容易に想像できるもの。そして案の定、ジョニーが姿を消した後、ジョニーの代役(?)をつとめていたロベルトは、拳銃を持っていたため警察から撃たれて

しまうことに……。

■ 思わせぶりのラストをあなたはどうか解釈……？

こんな映画はいろいろと面白い問題提起をしてくれるものの、始末のつけ方が難しい。そこでガス・ヴァン・サント監督は、どんなラストにもっていくのだろうかと考えながら観ていると、何とジョニーが再び戻ってくることに。彼の説明によれば、不法入国がバレて強制送還されていたのだが、再び国境を越えて入国してきたとのこと。2人が再会できたことは喜ばしい限り(?)だが、そこでロベルトの死亡を聞いたジョニーは怒ってウォルトの元を飛び出してしまったが、さてガス・ヴァン・サント監督が描くこの映画のラストは……？ それは、あなたの目でしっかりと……。

2007(平成19)年7月17日記

ミニコラム

表紙撮影の舞台裏(5)

『パート13』と『パート14』は同時刊行のため、「チョイ悪オヤジ SHOW-HEY」と「社会派弁護士章平」を対で見せるというアツと驚く発想を実現した。しかし『パート15』は「あの戦争を問う」4作品を収録したため、社会派弁護士の私としてはそれを際立たせるべく、広島原爆ドームをバックにした写真を探し出した。これは06年10月15日～16日の広島旅行での写真だが、単なるスナップではない。つまり、05年11月23日～24日の尾道にある戦艦大和のロケセット見学の際に撮った写真を『パート9』の表紙に採用したのと同様、将来何らかの用途に使用することを前提として撮ったものだ。もっ

とも、表紙写真用として何十枚も撮った中からベスト1を選出したものではない。旅の疲れを多少漂わせているが、「あの戦争」に対する私の熱い思いは伝わるはず。

07年の夏、「今こそ、太平洋戦争の悲劇を現代に問う!!」と特集をしたナナゲイこと第七藝術劇場は久しぶりのヒットに驚いたらしいが、それは貴重な問題提起をしたことのご褒美。そこで『パート15』では、表紙を見た後は真っ先に『ヒロシマナガサキ』と『夕風の街 桜の国』を読んでもらいたいものだ。

2007(平成19)年11月21日

第5章

これこそ本当のおススメ!